

東海道を歩く (4)

江尻宿～金谷宿

江尻宿

旧東海道の品川から数えて 18 番目の宿場である。「江尻」とは、清水港から府中への水運で賑わった巴川の尻、河口のことである。

大正 13 年 (1924) 江尻町・清水町・入江町などが合併して、現在の清水市が誕生した。

かつての江尻宿は、現在の清水駅の近く、明るく近代的な商店街「清水銀座」が本陣跡など宿場の中心になっていたが、今は宿場の面影はない。しかし行政上の地番として江尻町が残っていた。

商店街が終わり左折すると巴川に架けられた「稚児橋」を渡り、上方見付を過ぎてしばらく行くと、左に赤い大暖簾が見えてくる「追分羊羹」である。店の傍らには「是より志三づ道」と彫った道標がある。さらに行くと、「都鳥」一家の供養塔がある。

街道からはずれるが、西北の大内には、梶原景時の墓のある毘沙門堂があり、一方街道から南東に行くと、清水次郎長の菩提寺「梅蔭寺」や「生家」が残っている。さらに巴川に架かる「港橋」を渡ると次郎長が「仏になった者に官軍も賊軍もあるものか」と咸臨丸の旧幕臣を手厚く埋葬した「壮士の墓」がある。さらに霊峰富士の見える三保の松原まで足をのばすと「羽衣の松」や、出雲系の氏族が住みついて祭ったといわれる御穂神社 (式内社) が鎮座している。さらに久能山東照宮や登呂遺跡も見逃せない。

街道に戻り西にむかうと、大きな鳥居が見えてくる。この鳥居から 1.5km ほど南に登った所に草薙神社がある。祭神は日本武尊、境内には樹齢 2 千年といわれる大楠が枝を広げている。

府中宿

静岡県の中央に位置し、近くにある登呂遺跡で知られるように有史以前から農耕集落があった処。律令時代には駿河国の国府が置かれていた。戦国時代は今川、武田と領主が変わり、天正 13 年 (1585) 徳川家康の命により松平家忠が駿府城を築き城下町を造った。慶長 12 年 (1607) 家康がこの城を隠居所に定めてから城下はおおいに繁昌した。宿場の本陣・脇本陣・問屋場等は城の南側伝馬町に軒をつらねていた。また山岡鉄舟が勝海舟の手紙を携え西郷隆盛と会見したのもこの近くであった。しかし幕府瓦解、版籍奉還後「府中」は不忠に通じると市街地の北側に連なる賤機山に因んで「静岡」と改命した。

駿府城

天正 13 年 (1585) 徳川家康は浜松城から駿府城に移ったが、天正 18 年 (1590) 秀吉から関東への国替を命じられ江戸城へ移った。

しかし慶長10年(1605)将軍職を子の秀忠に譲ると、再び駿府城を隠居所と定め移り住んだ。家康死亡後は頼宣・忠長が城主になるが、以後は城代が置かれ、明治を迎えると廃城となった。現在は駿府公園として市民に利用されている。平成元年(1989)二ノ丸東御門や巽櫓が復元され往時の城構えを偲ばせてくれる。

このほか市内で立ち寄りたい所を列举すると、浮月楼・ここは庭園で名高いが、慶喜が隠棲した所。宝台院・家康の側室で二代将軍秀忠の生母・西郷局が葬られた寺。本尊の阿弥陀如来は国重文。浅間神社・神部神社、浅間神社、大蔵御祖神社の三社から成っている。24棟の建造物は国重文、特に楼閣造りの大拝殿は浅間造りの代表的建物である。神社の北側の賤機山には6～7世紀の横穴式古墳があり、石室には家形石棺を見ることができる。臨濟寺・賤機山の東側山麓にあるこの寺には、今川義元の廟所があり、この寺の禅式庭園は国指定の名勝で有名である。

東海道は札の辻、七間町を過ぎ、由比正雪が自殺した梅屋町の旅籠街を抜けて安倍川の手前左側にある名物「安倍川餅」にも寄りたい。近くには「安倍川の義夫の碑」が立てられている。

丸子宿

平安時代から鎌倉時代の「手越の里」を過ぎると「とろろ汁」で有名な丸子の宿である。

ここは梅の里でもあった。芭蕉は江戸に下る門人(乙州)に道中はつらいこともあるだろうが丸子のとろろ汁で慰めてほしいと歌っている。

「梅わかな 丸子の宿の とろろ汁」

近くには連歌師・宗長が隠棲した吐月峰・紫屋寺(臨濟宗)がある。また片桐且元夫婦の墓のある誓願寺も近くにある。

さらに東海道を西にたどれば宇津谷峠に突き当たる。平安時代に在原業平がこの峠を越える時、ツタやカエデの茂る暗い細い道で心細くなって歌ったのは、

「駿河なる 宇津の山への うつつにも
夢にも人に あわぬなりけり」

私が越えた江戸時代の峠道は、天正18年(1590)秀吉の小田原攻めの大軍を通すために開かれた道で、平安時代の峠より北側を越えている。峠入口の立場集落には、秀吉から頂戴した綿入り紙衣の羽織が保管されていた。

このほか慶竜寺に伝わる十団子の話や、峠越えした所にひっそりとたたずむ延命地藏堂に伝わる鼻取地藏の話や、鶯の細道を顕賞する「羅徑記」の碑がある。

岡部宿

宇津ノ谷峠を越えたところの山峡にある小さな宿場であった。宿場の手前・横添という所に西行山があり、弟子の西住の墓や西行笠掛けの松がある。本陣跡の手前左側に大旅籠「柏屋」があり、歴史資料館として内部を公開しているので見学しながら休憩するとよい。岡部町役場を過ぎたところに、石造の五智如来像が安置されている。ここは廃寺になった誓願寺があった所。

このほか街道から外れたところに光泰寺があり、江戸時代の佛師・木喰の作った聖徳太子像、准胝観音像が有名である。

藤枝宿

東木戸から瀬戸川の近くの西木戸まで2kmの長い宿場である。藤枝の地名は源義家が市内若一王子神社の藤の花を詠んだ歌にちなんだといわれる。家康ゆかりの田中城の城下町でもあった。

田中城 同心円形の縄張りで見られるこの城は、はじめ今川氏の命を受けた一色信茂が築城、その後武田氏、徳川氏と支配者が変わり、関ヶ原の戦いの翌年（1601）酒井忠利が城主になった。現在の本丸跡は西益津小学校になり、校内の一隅に田中城の模型が築かれ、四重の堀に囲まれた同心円の縄張りを見ることができる。ご承知のようにこの城を有名にしたのは、元和2年（1616）家康が鷹狩りに来て、この田中城で鯛の天麩羅を馳走になり、それに当たって亡くなったからである。近くの田中城下屋敷には二階建ての本丸櫓が移築され、庭園も整備されている。

街道に戻って宿場を歩いてみよう。東木戸近くの左車町には、県下唯一の成田不動が勧請されているが、境内を通りぬけた所に「左車神社」が鎮座している。建長年間、後嵯峨天皇の皇子・宗尊親王は六代将軍になるため鎌倉へ向かう途中、御所車の左輪が破損、修理のため休息したのが地名となっている。また宿場の中ほどに白子町がある。天正10年（1582）本能寺の変の時、堺見物をしていいた家康は、伊賀越へのうえ伊勢白子から海路岡崎に帰ったが、この時家康を助けたのが小川孫三郎で、家康はその労に報いるため、この地を与え諸役象除の白子町を開いた。このほか蓮生寺の熊谷直実。日蓮上人が自ら植えた大慶寺の久遠の松。旅人に評判の瀬戸の染飯など話題の多い宿場であった。

島田宿

島田鬻はここ島田宿の遊女が結いはじめたとか。しかしこの宿を有名にしたのは、大井川の川越し場で、特に川の増水による川留で繁盛した。

町の中心地に静岡銀行があるが、ここは俳人であり初代川庄屋をつとめた塚本如舟（孫兵衛）の邸宅跡で、松尾芭蕉は1691年と1694年の2回塚本邸に宿泊した。更に西に進むと島田の産土神である大井神社がある。洪水を鎮め安産をもたらす神として庶民の信仰を集めてきた。また江戸時代に、島田宿に嫁いできた新妻たちの間で、氏子になった報告と安産を祈願するため帯を奉納する風習が生まれた。島田大祭「帯まつり」である。さらに西に向かうと大善寺が右側に見えてくる。この寺の鐘が大井川の川明けと川留めの刻限を知らせたのである。さらに西に歩き左に入る旧道を進むといよいよ大井川である。

大井川川越遺跡

「箱根8里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」東海道最大の難所で、ここ大井川の川越遺跡は、川札を売る川会所、川越人足の待機所である番宿が復元され、江戸時代にタイムスリップした町並みになっている。

川越遺跡の下流に、時代劇のロケ地として利用される蓬莱橋は世界一長い木造歩道橋である。川越え場の河原近くに「島田市博物館」がある。ジオラマビジョンにより江戸時代の宿場の様子や川越し場風景が再現されている。長さ1kmの大井川橋を渡ると遠江国金谷宿である。

金谷宿

島田宿と同様川留めになれば川を渡れない旅人で賑わった。川越え施設も島田側と同様に設けられ

ていたが、金谷側には残っていない。SLで有名な大井川鉄道の踏切の手前を左に折れると白浪五人男の首領、日本駄衛門こと盗賊の浜島庄兵衛の墓がある。宿場の中心街を過ぎると、東海道は金谷駅の裏側（南側）に入り登り坂が始まる。駅の裏側には長光寺があり、境内には芭蕉の句碑がある。

「道のへの 木槿は馬に 喰われけり」

ゆるやかな坂を登っていくと平石の一人一石運動でよみがえった金谷坂の石畳につきあたる。この坂の上には、また芭蕉の句碑がある。

「馬に寝て 残夢月とおし 茶のけぶり」

このあたりの台地は牧の原で国指定の史跡である「諏訪原城跡」がある。天正元年（1573）武田勝頼が築いた山城で、放棄してから四百余年の年月を感じさせない深い空堀や自然の地形を活用した縄張が残されている。

石畳を下ると菊川の里である。江戸時代は立場にすぎないが、中世までは宿駅であった。「菊川の里会館」には、承久3年（1221）の承久の乱で捕らえられた藤原宗行は鎌倉に護送される途中この地で命を落とした。百年後の正中の変（1324）には日野俊基が捕らえられ、鎌倉へ護送の途中ここで歌った歌碑が建てられていた。

いよいよ東海道の難所として箱根峠・鈴鹿峠に次いで登り坂が長い「小夜の中山峠」が始まる。道端には旅人の疲れを慰めるようにこの峠を越えていった歌人の歌碑が現れる。

やがて右手に久延寺が見えてくる。掛川城主・山内一豊が家康を接待するため境内に茶室を設けた寺、家康手植えの松や、芭蕉の句碑がある。しかしこの寺を有名にしたのは「夜泣石」の話である。この寺の近くで山賊に襲われ殺された母親から生まれたばかりの乳児をこの寺の僧が水飴で育てた話で、寺の近く江戸時代から茶屋「扇屋」で現在もその飴を売っている。

その扇屋のむかい側の山を登った所が「小夜の中山公園」で、69歳の老僧西行法師がこの峠を越える時歌っている。

「年たけて また越ゆべきと 思いきや
命なりけり 小夜の中山」

「としたけて」と歌った西行は42年前の27才の時の孤独な漂泊の旅を思い出したと思う。しかし今回は源頼朝の東大寺再建にともなう盧遮那仏を金鍍金で飾るた、奥州の藤原秀衡のもとに砂金勧進の旅で、重大な使命をはたすためのはりついた気持ちと健康を歌いあげている。

私が「小夜の中山公園」に立った時、幸運にも桜の花が満開で、その枝越しに白雪をいただいた富士山を見ることができた。西行は次のように歌っている。

「風になびく ふじのけむりの そらにきえて
ゆくへもしらぬ わが思いかな」

小夜の中山から七曲りの急坂をくぐると、次の宿場「日坂宿」は近い。